

同窓生が語る宮澤賢治

村松舜祐教授と宮澤賢治・成瀬金太郎（3）

若尾紀夫（C昭39・院41）

村松舜祐教授と宮澤賢治との接点

村松舜祐教授の経歴や業績については、既に詳しく述べたので、ここでは村松教授と宮澤賢治との関わりについて触れよう。村松教授は、明治42年6月、盛岡高等農林学校に赴任し、昭和7年3月、京都高等蚕糸学校校長として転出したが、在盛中は、宮澤賢治や同級生である成瀬金太郎と深く関わることになる。村松教授は関豊太郎教授と似かよった点が多く、勤勉実直で近寄りたがたい雰囲気をもった存在であったが、兩人にとっては盛岡高農時代の恩師の一人である。

村松教授は、大正4年2月から大正6年2月までの2年間、農芸化学研究のため米国（イエール大学）に留学し、マンスフィールド通り164番の住人として過ごした。しかし、教授が留学中にどのような研究をしたのか具体的な記録は残っていない。村松教授の留守中は担当科目の講義や実験が空白になるため、母校農学科第7回生（明治45年3月）の神野幾馬が教師（大正4年1月）として採用され、同年6月には助教授になり、物理・化学・同実験・農産製造を担当した。また、東京帝国大学農科大学農芸化学科の助手であった黒野勘六が講師（大正4年2月）として赴任し、細菌・農産製造・同実験・植物栄養論を担当、大正9年11月には講師嘱託を解かれた。

一方、賢治は、大正4年4月、盛岡高農農学科第2部（後の農芸化学科）に入学し、大正7年3月、得業論文を提出して卒業することになる。賢治の入学は、村松教授の留学と入れ替りになり、結局のところ、学部時代の賢治は村松教授とは最終学年の1年間のみ一緒になった。村松教授が担当した大正3年の学科目（講義・実験）をみると、化学・同実験・分析化学・同実験・農産製造・細菌学であり、その内の農産製造と細菌学が第3学年の通年受講となっている。従って、賢治は3年生（大正6年4月以降）になって、留学から帰国した村松教授の農産製造や細菌学等の講義を初めて聴いたものと推察される。

賢治3年生の時、大正6年11月3日、「盛岡高等農林学校農学科第二部三年の学生、村松舜祐教授の引率により、二戸郡下の見学に行く」との記録があるが、具体的な内容は不明である。

1学年下の保阪嘉内の日記（宮澤賢治 友への手紙）には、「二部会にて諸先生、黒野氏と会す、日盛軒」とある。「二部会」は、農学科第2部の職員及び学生が所属する親睦会で、大正5年11月2日、賢治2年生の時、この「二部会」が「日盛軒」で行われたことを示している。賢治も同席していたのであろうか。ここで黒野氏とは黒野勘六講師のことであり、日盛軒は内丸にあり秀清軒と共に当時盛岡では一流の西洋料理店であった。

盛岡高農を卒業してからも、賢治は村松教授と親交をもち、稗貫（花巻）農学校の教え子を盛岡高農に就職の世話をしたり、搗粉としての炭酸石灰利用についての助言を求めるなど、多くの接点が見られ、その関係は村松教授が京都に栄転（昭和7年3月）するまで続いた。炭酸石灰利用（搗粉）については、次回述べてよう。

宮澤賢治から成瀬金太郎への手紙

農学科第2部の宮澤賢治と成瀬金太郎・佐々木又治（工藤に改名）は、卒業式（大正7年3月15日）に出席しないで横浜から出帆、カロリン諸島東方ポナペ島、ピングラップ島の南洋拓植工業株式会社に赴任した。そこで2年間過ごした後、大正9年3月に帰国した。その後、成瀬金太郎は盛岡高農に職（講師）を得、佐々木又治は賢治退職後に花巻農学校に勤めることになる。

賢治は、卒業式の前日（大正7年3月14日）、南方に赴任する成瀬金太郎宛て葉書を書き「君を送り君を祈るの歌」6首を詠んでいる（書簡48a）。

・はてしらぬ蒼うなばらのきらめきをきみかなしま
ず行きたまふらん

- ・すべてこれきみが身なればわだつみの深き底にもおそれはあらし
- ・あ、海とそらとの碧のたゞなかに燃え給ふべし赤き経巻
- ・このみのりひろめん為にきみは今日とほき小島にわたりゆくなり
- ・あ、ひととわれらとともにまことなるひかりを地にもむかへまつらん
- ・ねがはくは一天四海もろともにこの妙法に帰しまつらん

「君を送り君を祈るの歌」の君とは誰なのか。それは成瀬金太郎であるが、同時に賢治自身ではないだろうか。南国の碧い海とまぶしい光の中を進んでゆく親友に自分を重ね、「まことなるひかり・妙法」に自身を帰依したいと詠っているように思われる。15年後、賢治は辞世の句「病のゆゑにもくちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし」を遺している。この両者には相通ずるものがあるが、前者にはまっすぐに突き進むような賢治の張りつめた思いが、後者には賢治の深く静かな願いが感ぜられる。

ここで「赤き経巻」とは、賢治座右の書である島地大等編「漢和対照妙法蓮華経」で成瀬金太郎に贈ったものであろう。本人と夫人（成瀬 富）の言葉によると、その経巻は疎開の時に紛失し大変落胆したと書かれている。「(夫人) 東北の平和な盛岡でさえ戦火を受けた昭和20年、盛岡でも疎開するようになり出したので、成瀬はそれまで集めた専門書などを香川県の田舎の両親のところを最も安全だと判断して鉄道便で四国高德線「造田駅」留めで疎開させました。(略) 書籍10ヶ口の三ヶが送る途中で紛失してしまいました。(略) 紛失した書籍の一部には、宮澤賢治様からいただいたものもあり残念がっています。」「(本人) この紛失物の中には宮澤賢治君から贈られた法華経の本、学生時代の記録、南洋拓殖株式会社当時の貴重な記録が一杯詰まって居たので損害は甚大であった。(成瀬金太郎小伝)」

その手紙からほぼ一月後（大正7年4月18日）、賢治は成瀬金太郎宛てかなり長い手紙を書いている（書簡55・封書）。成瀬金太郎が盛岡を出発した次の日に、賢治は下宿を訪ねたがすれ違いで会えなかったこと、遠い南洋に行っても妙法蓮華経の教えにより奮励するよう望むことなどを書いている。また、文末では「ト申シテ私ナドハ気バカリ急イデサッパリ進マズ、ナマケルバカリ考ヘテ居マス。(略) アナタノ方カラドウカ励マシテヨコシテ下サイ。」と結んでいる。このことから、卒業を控え、賢治は自分のおかれている境遇、将来の進路（職業）について

大いに悩んでいること、「あなたの方からどうか私を励まして下さい。」という賢治の揺れ動く思いが伺える。このような賢治の心境は後の手紙からも明らかになる。

「コノ度ハ御目出度ウ存ジマス。御身体ノ工合ニ御変リハアリマセンカ。耳ノ方ハ宜シク御ナリナサイマシタカ。貴方トユックリ御別レスルヒマモナク、俄ニ御発チニナツテシマツテ誠ニ残念ニ存ジマシタ。

盛岡ヲ御発チニナツタ翌日、私ハ新シイ本ガ間ニ合ハナカッタノデ、私ノ貫ツタ古イ本ヲ懐ニ入レテ晩方御宿ニ行キマシタラ、下宿ノオカミサンガ出テ来テ、モウ昨夜御発チニナツト申シマシタ。ソノ人モ大変心配サウニシテ居リマシタ。私ハソレカラ仕方ナク細山田君ノ所へ行ツタラ外へ出テ居マセンデシタ。何トモ言ヘズ淋シク思ツテ私ハヤハリ停車場へ誰ヲ送ルト言フコトモナシニ参リマシタ。実ハアナタトユックリ御話シ合フ様ナ事ガ御互ニ沢山アッタノデスカラソレデアンナ気持ダッタノデセウ。タトヘ南洋へ御出カケニナリマセウガ又同ジ盛岡ニ居マセウガ、ドウセオシマヒハ同ジ事デスカラ楽シミデス。御互ニ之カラ所モ離レ又近ヅキ、境遇モ又変リ同ジナルトシテモ、御互ニ唯一ノ目的ノ為ニ一切ノ衆生ノ為ニ進ンデ行クナラバ、悲シミハ悲シミデモアリマセン。又元来悲シミヤ楽シミノ本体モノイノデセウ。「コレガ本統ノ悲シミダ。」ト思フコトハアルデセウカ。「コレガカナシミト言フモノナサウダ。」ト感ジ「ドコガソノ本性カ。」ト尋ネテ行ケバトウトウ捕マヘ兼ネマス。

楽ハ苦ノ種デモ苦ハ楽ノ種デモナク、苦ガヨイ事デモ楽ガヨイコトデモナク、又ドチラモ悪イコトデモナク、楽ハ苦ト同ジデモナク違フデモナク、唯楽ハ之レ妙法蓮華経ノ楽、苦ハ之レ妙法蓮華経ノ苦ニチガヒアリマセン。

妙法蓮華経ハ私共本統ノ名前デスカラ之ヲ譏ルモノハ自分ノ頸ヲ切ル様ナモノデセウ。至心ニ妙法蓮華経ニ帰命シ奉ルモノハヤガテ総テノ現象ヲ吾ガ身ノ内ニ盛り、十界百界諸共ニ成仏シ得ル事デセウ。

嗚呼ボナベ島ハ三世諸仏ノ成道シ給ヘル所、三世諸仏ノ妙法ヲ説キ給フ所、三世諸尊ノ涅槃ニ入り給フ所、法華ニ帰命シ奉ル人ハ過去ニ多クノ諸仏ヲ供養シ奉ツタ人、現在ニ諸仏ニ遭遇シ奉ル人ト聞キマシタ。

現在遭遇ノ諸仏ハソノ島ニ既ニ臨ミ給ヒマシタ。「一一文々、是真仏、真仏説法利衆生。」何卒一切ノ為ニ切角御奮励下サル様。ト申シテ私ナドハ気バカリ急イデサッパリ進マズ、ナマケルバカリ考ヘテ居マス。平和ナ本国カラコンナ手紙ヲ書クテハアリマ

センデシタ。アナタノ方カラドウカ励マシテヨコシテ下サイ。」

前の手紙から丁度一年後（大正8年4月15日）、賢治は成瀬金太郎に宛てて返書を出している（書簡143・葉書）。

「御便りありがたう存じます。お変わりもなく何とも結構に存じます。今度の巴里の会議では、その島はこのまま日本に止まることは勿論でせう。私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。あなたが感ずる様に暗黒の時代は近いかもしれません。その暗黒のただなかをまっすぐに通り抜け、かがやきの国に立ってふりかへって暗黒の国の壁を破るひとはあなたの様にめまひのする様なはげしいところで力をつくりあげるのでせう。」

その一年の間に、賢治になががあったのか。大正7年3月、盛岡高農を卒業した賢治は、関豊太郎教授の勧めで研究生（実験指導補助）として残り、稗貫郡地質調査及び土性調査に参加した。調査は大正7年4月に始まり8月末に終了、9月末には「稗貫郡地質調査報告書」を取りまとめている。但し、8月末には願いにより実験指導補助を解かれたので、研究生としての賢治の仕事は実質的には報告書提出までとなり、その後賢治は研究生修了（大正9年5月20日）まで殆ど関教授の研究室に出入りしていないと思われる。

賢治は、卒業を控えた3年後期（大正7年1月以降）、また同年6月下旬に、自分の将来や職業について父親（宮澤政次郎）と話し合いをしたが、お互いに納得いくものではなかった。ところが、その年の12月、日本女子大学で学んでいた妹トシ入院の報せを受け、賢治は母イチと共に上京しトシの看病にあたった。翌大正8年2月下旬トシが退院するのを待って、3月3日、賢治はトシと花巻に戻ってきた。

妹トシの看病のため滞京中、賢治は仕事を見つけて自立したいとの思いから、父親に頻りに手紙を書いている。大正7年12月30日の手紙では「(略) 尚当地滞在中私も兼て望み候通りの職業充分に見込相付き候。」として蛋白石や瑪瑙等を販売する見込みが見つかったので岩谷堂産蛋白石を見本として送るよう書き送っている。その後の手紙（大正8年1月27日）では、「(略) 何卒私をこの仮当地に於て職業に従事する様御許可願ひ度事に御座候。色々鉱物合成の事を調べ候処、(略) この仕事を始めるには只今が最良期なる事 (略)」としてこのまま東京で鉱物合成の仕事をしたい旨書き、父親の許可を求めている。この時、賢治は東京に永住して仕事をする考えであっ

た（書簡102）。「宅へ帰りて只店番をしてゐるのは余りになさげなきこと、東京のくらし易く、花巻等に比して少しもあたりへ心遣ひのなきこと (略)」と心の内を書きしるしている。

その後の手紙で、賢治は自分が考えている様々な具体案を書いている。飾石・宝石・印材の研磨、ネクタイピン・カフスポタン・指輪等の製造、鍍金、鉱物（宝石）合成等を計画し、必要経費や仕事をする場所まであげている（大正8年1月31日）。次の手紙（2月2日）では、前の事案について更に詳細に綴っている。「(略) 机上の考は経済、技術両面共大体右の如く相運び候。これがいかにて失敗するやを觀察致すもよき学問に有之、この後は只やりて見るより仕事無之候。(略) しくぢりても宜しく候間何卒一つしくぢらせる積りにて仕事に掛る様御許し下され度候。」このように自分の考えを詳細に述べてしくじってもよい経験になるので許可して欲しいとまで書き送っている。

さらに「(略) 宅全体こちらへ移り長屋にても建て、之を管理するとか手堅き金融等を仕事とし先づその準備として左様の事を私が直ちに着手しては如何 (略)。とし子も今後は寒き処は好ましからず生活も花巻程に骨も折れず人氣もあれ程陰険には無之二三年の間に家の主部をこちらへ御移しなされては如何に御座候や (略) (2月5日)」と一家で花巻から東京へ移住することを提案している。

ところが、別の手紙では、「私の職業等は又後の問題に致しても宜しく候へどもそれ程遠稼ぐと云う事が心配なるものに御座候や。何卒私に落ちついてまじめに働くべき仕事を御命令被成下度候。車の後押にても純粹の百姓にても何にても宜しく候。又私に自由に働く事を御許し下され候や。宝石等を扱へばこそ都会に住む事も必要に御座候。どこにても宜しく候。」と締めくくっている。しかし、賢治は「早速帰宅御命令の手紙只今拝見仕り候。(略) 明夜は何とか都合して帰り申すべく候。」との返事（2月6日）を父親に書き送り、3月3日にはトシを連れて帰花することになる。

それまで、自分の一生の職業として東京で宝石等の仕事をやりたいこと、東京へ一家移住してはどうかなど父親に相談してきたが、結局はその希望や提案にたいして父親の承諾を得ることができなかった。2月5日の書面には「どこでもなんでもよいので自由に働くことを許してください。」と開きなおった心情、何とも云えない深い失望感・挫折感がみられる。

このような背景のもと、東京で自立するという夢が破れ花巻に帰って来た賢治は、質屋で店番をしな

がら鬱々とした日々を送ることになる。次の保阪嘉内宛の手紙（4月・日付不明）から、失意の賢治の様子が見られる。「私のうちは古着屋でまた私は終日の労働に堪えないやうなみじめなからだな為にあなたの様に潔い大気を呼吸しては居りません。畑を起したり播いたりもして見ましたし便利瓦といふものを売って見たり錦絵が面白くなって集めたり結局無茶苦茶です。（略）煮えきらないものは一生こんなことを苦しんでゐなければなりません。（略）私にはあなたがかゝやいて見える。」

前記した成瀬金太郎宛の手紙「私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。」からも、日本を飛び出し光り溢れる南国で働く2人の友人と、郷里花巻に留まり薄暗い部屋に只座っている我が身を比べ、もがき悲しんでいる賢治の姿が伺える。

村松舜祐教授と宮澤賢治と教え子ら

大正10年1月、賢治は家出同然に上京したが、8月には妹トシの病気の知らせを受けて急遽花巻に戻った。その年の12月3日、賢治は稗貫郡立稗貫農学校に職（教諭）を得て、大正15年3月31日の依願退職まで4年余り勤務し、代数・農産製造・作物・化学・英語・土壌・肥料・気象・水田稲作実習などを教えた。修業年限2年の稗貫農学校は、大正12年4月1日付けで岩手県に移管され県立花巻農学校（修業年限3年）に昇格した。

農学校時代の賢治は、大変に面倒見がよく教え子の就職の世話や進路の相談などを行い、また教え子が就職した後も、手紙を書いたり直接職場を訪れては様子を見ている。賢治は、盛岡高農の村松舜祐教授や成瀬金太郎助教授等のもとに幾人もの教え子を就職させた。「賢治は、卒業生の世話見もよく、就職、進学を指導し、高農の助手への道を開いたのも先生で、最初（大正12年4月）及川留吉を無機化学の伊藤教授に、大内納豆の長男大内金助を村松先生のもとに、小田中光三を畜産学教室に、翌年（大正13年4月）は簡悟を賢治の同級生成瀬先生の農産加工室に託し、更にその翌年（大正14年4月）小原 忠を村松先生の助手へ世話した。その外にも一人を助手に送っている。この就職斡旋の為にも屢々母校を訪れている。（宮沢賢治の五十二箇月、盛岡高等農林学校と鈴木梅太郎・宮澤賢治）」

ここでは、稗貫農学校2回生の及川留吉、大内金助、鈴木操六、小田中光三、花巻農学校3回生の佐藤伝四郎、簡 悟、同4回生の小原 忠について紹介しよう。

及川（福田に改名）留吉

及川留吉は、大正10年4月、稗貫農学校に入学、大正12年3月に卒業（2回生）した。卒業後は、賢治の世話で盛岡高農農芸化学部の実験助手として就職した。昭和3年3月に依願退職したので、在籍期間は5年間となる。

農芸化学部では、伊藤武男教授（専門：物理・物理化学・分析化学など）の実験室に所属した。伊藤教授については、既に前号で取り上げたので、ここでは詳細は避けるが、専門外の納豆についても関心を持ち「納豆の成分に就て」研究している。恐らく、当時納豆の研究を精力的に行っていた村松教授の影響を受けたものと思われる。及川留吉が実験助手としてどのような仕事をしていたのか分からないが、化学分析技術や農芸化学の勉強をしたと云われる。村松教授の指導で納豆の研究に携わった可能性もある。

賢治から及川留吉あての手紙（封書）2通が存在する。1通（書簡199b）は大正12年4月14日付けの「盛岡高等農林学校農芸化学部助手 及川留吉宛」で、この年の3月に卒業し、賢治の紹介で盛岡高農農芸化学部の助手となった元教え子及川留吉に宛てた手紙である。その内容は、稗貫農学校同期生の近況などを彼に知らせ励ましたものであり、文中には鈴木操六、沢田作衛、小田島治衛の名がみられる。村松先生は当時農芸化学部の部長をしていた村松舜祐教授であり、鈴木操六は後に盛岡高農農芸化学部に入学し、沢田作衛と小田島治衛は何れも家業の農業を継いだ。

「たびたびのお便りをありがたう。今度はまあ恰度いゝあんばい寔に結構でした。村松先生もお悦びのやうですどうかしっかりやって下さい。鈴木君は東京のある医師の家で書生をしながら夜学に通ってゐます。沢田、小田島両君は更木の耕地整理にはいりました。みんなお互いにかからだを大切にしてください。先頃はまた兄さんがわざわざ学校まで入らして結構なお品物まで戴き本統に恐縮です。こちらへ帰ってもし暇のあったときはどうか学校なり私の家なりに寄って下さい。今ごろになって又雪が降ったりして大へん困ります。学校では苗代は四畝作りしましたが雪の為にまで馬肥もかけられず折角天気になるのを待ってゐます。どうか体を大事にして下さい。」

もう1通（書簡199c）は、大正14（推定）年10月5日付けの「盛岡高等農林学校農芸化学部助手 及川留吉宛」で、「（冒頭欠）ませうか折角ご自愛を祈ります。かくかうが来たと思つてゐるうちに早くも今年も収穫季節になりましたどうか辛抱してしっかりやってください。」という内容で、教え子を励ま

したものである。

及川留吉は伊藤教授や村松教授の指導を受けた後、村松教授の推薦によって大阪市立衛生研究所の研究員となり、次に京都宇治の酵母研究所に勤務、パンの腐敗菌や酵母の研究に従事したと云われる（宮澤賢治の五十二箇月）。昭和6年3月には婚姻により福田姓に改名、終戦後は盛岡に戻り、昭和23年、長田町で製パン業（福田パン）を創業した。福田パンは現在でも発祥の地にあり、盛岡では根強い人気がある。福田パン・及川留吉・宮澤賢治・村松舜祐教授は、意外な伏線で結ばれている。

大内金助

賢治の生家と同じ豊沢町の大内商店の長男である大内金助は、大正10年4月、稗貫農学校に入学、大正12年3月卒業の2回生である。卒業後は、賢治の紹介で盛岡高農農芸化学部に助手として入り、村松教授のもとで納豆菌の純粋培養や納豆製造の研究に携わった。1年間勉強した後、家業である大内商店（納豆製造）を引き継ぐことになる。「村松納豆」・「高農納豆」は大内金助が継承し、今でも「花巻納豆」として生きている。花巻納豆・大内金助・宮澤賢治・村松舜祐教授（納豆博士）にも、このような歴史的な背景が見られる。

鈴木操六

豊沢町の生まれである鈴木操六は、大正12年3月、稗貫農学校を卒業（2回生）し、大正14年4月に盛岡高農に入学した。この間の2年間の空白について疑問に思っていた。及川留吉宛て書簡（大正12年4月14日）（199b）で、賢治が「鈴木君は東京のある医師の家で書生をしながら夜学に通ってゐます。」と書いていることから、農学校卒業後上京、夜学に通いながら勉強していたと思われる。その後、大正13年4月、賢治の世話で岩手県立水沢農学校（3年次）に編入学、大正14年3月に同校を卒業（22回生）した。

大正14年4月には盛岡高農農芸化学部に無事入学、昭和3年3月に卒業（第23回生）した。卒業前年の昭和2年8月、卒業論文を作成するに当たり、賢治のもとに専攻科目の相談に行った。それについて賢治は、酵素化学の重要性を説き、鈴木操六はそれに従ったと云われる。

「私の（宮澤先生）訪問は農学校時代から農林時代、卒業後と、20数回ある。（略）私としては来年3学年の卒業論文作成（昭和3年3月提出）を控え、その専攻科目の選択をしなければならず、それについて話したところ、立ち所に「それについて貴方に話したかったのだ。それは酵素について勉強しなさい。

これからは農学ばかりではなく、工業は勿論、医学方面でもその他のあらゆる産業は酵素を活用することで開発されて行くから、是非あなたはそれをやるべきだ。」として酵素化学の重要性について語り聞かれ、そこで私はその忠言をありがたく守って専攻科目をその場で決定した次第でした。（宮澤賢治とその周辺）」

ところで、大正から昭和初期の「酵素」に関する研究はどのような状況であったのだろうか。酵素は触媒活性をもったタンパク質で、生体内におけるほとんどの生化学的反応は酵素によって行われる。明治30年、ブフナーによって酵素が物質として酵母から初めて取り出され、20世紀とともに近代酵素学の幕開けとなった。生体から取り出された様々な酵素本体についての研究と並行して、生体内における酵素の働き（代謝系と関与する酵素）に関する研究が、大正9年頃から活発に展開された。

このような時代背景のもと、賢治は、酵素についての情報をいち早く入手し、その重要性を既に認識していた。まさに賢治の関心の広さ、本質を見抜く力、先見性を示唆するものである。

鈴木操六の卒業論文のテーマは「清酒醸造に就て」であり、鈴木十三郎・鈴木操六・渡辺忠雄の3人で共同研究し論文を作成した。指導教官は村松舜祐教授と成瀬金太郎助教授であり、後に述べる助手の簡悟（花巻農学校3回生）への謝辞も見られる。論文は167頁の大作で、以下のような概要である。清酒に関係ある微生物、清酒醸造用水、酒造用水、種麴及び麴の製造法、酒母、醪、新酒鑑定、村松博士合成酒。

小田中光三

小田中光三は、大正12年3月、稗貫農学校を卒業（2回生）し、賢治の世話で盛岡高農農学科畜産学教室の畜産学実験室に助手として就職した。昭和3年3月付け畜産学実験室臨時雇の記録があるが、翌年の名簿には名前の記載がないので、昭和3年度末まで在籍していたと思われる。

ところで、当時の畜産学教室の教官は草刈虎雄教授であった。同教授は、東京帝国大学農科大学農学科卒業後、農商務省畜産試験場技手として勤めていたが、大正12年1月、盛岡高農に赴任（講師）、畜産学・同実験・畜産製造学等を担当した。昭和15年4月10日、退職して満州奉天大学に赴任したが、その後、盛岡に戻り盛岡高農の第5代校長（昭和18年10月31日～昭和19年11月17日）となった。丁度、盛岡高等農林学校から盛岡農林専門学校へ移行する変革期であった。

佐藤（山田に改名）伝四郎

佐藤伝四郎は、花巻農学校3回生（大正13年3月卒業）で、盛岡高農農芸化学部の助手となったが、どの教室（教授）に所属したかは不明である。大正15年11月の名簿に名前が見られないので、在籍期間2年と推測される。

簡 悟

簡 悟は、花巻農学校3回生（大正13年3月卒業）で、稗貫農学校で一年、花巻農学校で一年、都合2年間、賢治の教えを受けた。賢治の推薦で、大正13年4月、盛岡高農農芸化学部の助手として就職した。具体的には、賢治の同級生である成瀬金太郎助教授（農産加工室）の下で5ヵ年勤務した。鈴木操六の卒業研究では、助手の簡 悟がお手伝いしたのであろう、彼への謝辞が見られる。昭和3年3月31日付け臨時雇の記録が最後になるので、昭和4年4月には退職したと思われる。

小原 忠

小原 忠は、大正14年3月、花巻農学校卒業（4回生）後、賢治の世話で盛岡高農農芸化学部の村松舜祐教授の助手となるが、大正15年4月に花巻農学校（この年履修期間が1年延長され3年制に昇格）に再入学した。そして、花巻農学校の6回生（昭和2年3月）として卒業し、昭和3年4月、盛岡高農を受験して農芸化学部に入学した。昭和5年3月に卒業したが、その卒業論文の所在（テーマ）は不明である。このような小原 忠の履歴は、本人が述べているように村松教授の影響よるところが極めて大きい。

「(略) 私は村松先生の学究の態度に真の学者の姿を見た。(略) 私のようにまだ若く至らぬものを良く教えてくれ、若いときに進学して勉強した方がよいと励まされ、私ものに農芸化学に入学することになる。(盛岡高等農林学校と鈴木梅太郎・宮澤賢治)」

「(略) 卒業したらどうするかあまり深く考えなかった。先生（注：宮澤賢治）は盛岡高等農林学校農芸化学部の部長である村松教授の助手に世話してくれた。こうして、生徒の向き不向きに従って手土産を持ってはよい仕事を探しそれぞれ生徒を世話された。こうして高農にも数人が助手に入った。私も知らない間に助手になったのであるが、その後すぐ村松先生のところに來られて私のことをよく頼まれたらしい。博士（注：村松先生）はあとでそのことを話していた。また五月の末の日曜日（注：大正14年5月24日）に当時北小路幻といった森（注：森莊巳池）さ

んと一緒に研究室に様子を見に來られ、小原君は詩をつくるから見てやってくれと紹介された。そのあと、当時盛岡で一流である西洋料理店日盛軒につれて行って定食を御馳走してくれた。

一年助手をしていたら花巻農学校が3年制に昇格になった。そのことが官報に掲載された日、村松先生はその官報をもって来て、行って入って来いと云われた。私は宮澤先生から、ここで長くおってやるように云われている、今やめて入る意志がないと云うと「いや、若い時はできるだけ学校に進んだ方がよい」云われるので、帰って3年に進学した。私は一途に高農に入るべく死にもの狂いの受験勉強を始め、先生にあまりお目にかかる機会はなかった。幸いにどうやら農芸化学科に入学出来た。

卒業の際に卒業論文について相談したら私の資料を出すから「岩手県中部地帯における施肥技術について」書けと速座に目次と参考文献をかいて示した。結局実験中心のテーマをやることになり、これはものにならなかった。(宮澤賢治全集・月報11)」

「私は高農に入る前一年間、宮澤先生の推せんによって化学部長の村松博士の研究室で助手をした。村松先生は有機化学の外、応用微生物、農産加工を担当されていたから下台の成瀬先生の農産加工室に何辺となく行き來した。宮澤先生がある日曜日、研究室に訪ねて來られ、痩せたようだが勤めはひどいだろうといたわれ、御馳走になった事がある。斯うして教え子の仕事や健康を気づかわれる人であった。(宮澤賢治とその周辺)」

「森さんと一緒に研究室に様子を見に來られ、小原君は詩をつくるから見てやってくれと紹介された。」という文面が見られることから、彼は詩を詠んでいたようだ。当時（農芸化学科1年）、小原 忠が詠んだ詩2題、「海（5編）」「初夏断章（2編）」が盛岡高等農林学校校友会々報 第51号（昭和3年12月発行）に掲載されているので紹介しよう。

「海」

- ・防波堤にたゞすみあれば穏やかに湾静まりて磯の香のする
- ・海荒れの轟く夜は寂しかりひとり室にゐて家を思へる
- ・便りか、ぬ人の思はれ眠られずしみじみ海の遠鳴りをきく
- ・空は暗く海はわかたず沖とほく灯の見ゆ消ゆるごとくに
- ・沖をゆく漁火は哀し濃闇に消えさるゝごときほそき灯

「初夏断章」

- ・鈴蘭がりの帰りなるらし雨に濡れし汽車よりあまた少女おりたつ
- ・朝まだきとぼしる汽車の路こえて野茨の花露にぬれおり

盛岡高等農林学校における宮澤賢治追悼

昭和8年9月21日、宮澤賢治永眠、37歳であった。賢治の死後、盛岡高等農林学校の職員や卒業生等が発起人（総代・成瀬金太郎）となって追悼を行い弔慰金を集めている。その経緯が同窓会報第36号（昭和8年12月25日）、第37号（昭和9年3月25日）に掲載されている。追悼文を書いた堀籠文之進は、盛岡高農農学科第1部出身（大正10年3月）で賢治の3年後輩、また農学校の同僚である。また弔慰金の募集は同級生の成瀬金太郎が中心になって行ったものであろう。

追悼文「宮澤さんを憶ふ」(堀籠文之進)

(略) 宮澤賢治さんは遂々逝かれたのだ。宮澤さんは母校を出られるや母校の研究生となられたり、関博士の助手となられたりしたが、後郷土の人々の求めから花巻町にあった農蚕講習所の講師に就任、次いで稗貫郡の嘱託として同郡の土性調査に従事し関博士の片腕として幾多の困難を重ねて土性図の完成を見たのである。地質方面では立派な権威者であられた。(略) 大正10年12月、稗貫農学校に教鞭をとられる様になり私は此の時より御交際を願ったのである。透徹せる頭脳と高潔なる人格とは、忽ち生徒等を信服せしめずにはおこななかった。地方人の信望また頗る厚くどんな乱暴な人でも悪性の人でも宮澤さんに頭を下げぬ人はなかったのである。宮澤さんは人に接するどんな身分の低い人にも敬虔な態度であり、善を愛し、悪を憎む事強く、人に寛に己に厳に身を持せられた。服装などは少しも意にせられず、洋服も古いもの、靴はゴム靴と定めてゐた。色や柄や質は問題でない只良く整ふて居れば足りると云ふのが持論であった。給料は書籍代となり貧しき人々への慰藉として姿を消して行くのであった。(略) 夜となく昼となく文想の湧いて来る毎に白玉の如き詩が次々に生れて行くのである。真夜中に町となく里となく彷徨ひ歩くのが好きであって夜歩をは恐ろしいと人々が云ふが俺の恐ろしいものは人間ばかりで、夜歩きは何も他の事に気が散らないで感じをまとめるのに最もよいと口々にして居られた。

(略) 御家族の御悲歎は筆紙で表はす事が出来ない此の上ない悲しみの極と云はねばならぬ。だが宮澤

さんの遺された功績は永遠に光りを揮つてあらう。吾々は其の光りを仰いで慰められ励まされる事としやう。ボソボソと降りしきる雪の日陰をガサガサと踏み踏みして榛林の小径を烏打帽子を真深に被ってゴム靴を穿き口笛を吹いて両手はポケットに寂しく歩いて行く宮澤さんの姿を目の当りに偲んで亡き霊の御冥福を心から祈る次第である。合掌 (略)

故宮澤賢治君弔慰金募集広告

故宮澤賢治君には大正7年3月農学科第二部を得業せらるゝや研究生として関博士の下に地質土壤学を専攻され、後岩手県稗貫郡農蚕講習所の講師として赴任兼ねて同郡役所嘱託となり同郡下の土性調査を行ひ精細なる土性図を完成せられ、他方農業に裨益せる處尠からず。後仏教を究めんと上京日蓮宗に帰依し名僧の門を敲き国柱会に入りて佛心の会得に専念せられ、更に身を以て駿さんとて労働者の群に入り難行苦行を積まれ、次いで大正10年12月稗貫郡農学校教諭に就任せらるゝや、円満高潔にして秀れたる人格才能は忽ち生徒の敬慕信任を博した。又屢々地方を巡回し諄々として農民を指導啓蒙され其功績顕著なるものあり。大正15年3月遂に意を決して全校を辞任し花巻近郊に農事相談所を開設し専ら農民の指導に盡粹せらるゝと共に、君独特の詩想を纏められ「春と修羅」並に「注文の多い料理店」等の詩集及童話集を公表し其名噴々たり。惜むらくは昭和4年秋より著しく健康を害し病臥せらる。其間一度快方に向はれたるも再び病勢進み遂に昭和8年9月(原文は10月)21日午後一時永眠せらる。

今や国家の非常時農村更生の声喧囂たる時、実に君の如き熱意を有する偉大なる人格者に俟つ所極めて大なるものあり。然るに君今や亡し之洵に国家地方農村の為痛惜の至であると同時に御家族の御愁傷さこそと察せられ転々哀悼の情に堪えず。茲に同志相諮り生前の辱知各位の御同情に訴へて左記要項に依り弔慰金を募集せんとす。冀くは御賛同を賜はらん事を。

記

1. 締切期限は昭和9年1月末日
2. 御送金は盛岡高農内 成瀬金太郎宛
3. 弔慰金は御霊前に供ふること
4. 領収及決算報告は同窓会報に掲載のこと

発起人

成瀬金太郎、工藤又治、原 勝成、小野寺伊勢之助、神野幾馬、堀籠文之進、川村悟郎、高橋秀松、及川四郎、小原 忠、その他(総数42名)

故宮澤賢治君弔慰金決算報告

謹啓 愈々御清穆の段奉慶賀候 陳者故宮澤賢治君弔慰金に就ては各位の熱誠なる御援助御賛同を辱ふし発起人一同感謝罷在候 釀金は芳名録を添へ遺族に贈呈致し候處左記領収證並に禮状を寄せられ候間御了承被下度茲に御禮旁々御報告申上候

昭和9年3月 発起人一同

釀金者芳名録

農芸化学部、村松舜祐、小野寺伊勢之助、成瀬金太郎、工藤又治、小菅健吉、原 勝成、細山田良行、岩田元兄、神野幾馬、堀籠文之進、小原 忠、川村悟郎、及川四郎、近森善一、その他（総数70名）

故宮澤賢治君弔慰金募集決算報告

収入 金140円82銭
事務費を除いて 金133円63銭也（遺族へ贈呈）

領収證

金133円63銭也
右金額故宮澤賢治君弔慰金として正に領収仕候也

昭和9年3月31日

宮澤政次郎（印）

委員 成瀬金太郎様
同 堀籠文之進様
同 工藤 又治様

禮 状

時下春寒尚難去候處益々御清勝之御事大慶の至り奉賀候 昨秋賢治長逝に就ては其節も御懇篤なる御同情を以て種々御厚配被下尚引続き深厚なる御配慮にあづかり本日各位御釀集に依り御弔慰金御贈付賜り御厚誼の段誠に難有奉深謝候 各位様にも追て御挨拶申上度存候へども不取敢茲に御禮迄申上候

匆々敬具

昭和9年3月31日

宮澤政次郎

発起人総代 成瀬金太郎様

賢治辞世の句

- ・方十里稗貫のみかも稲熟れて祭三日そらはれわたる
- ・病のゆゑにもくちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし

参考資料

- ・宮澤賢治全集 第11巻 月報11：筑摩書房（昭和32年）
- ・宮沢賢治 友への手紙：保阪庸夫・小澤俊郎共著、筑摩書房（昭和43年）
- ・宮澤賢治とその周辺：川原仁左エ門編、刊行会出版（昭和47年）
- ・成瀬金太郎小伝：成瀬金太郎著、杜陵印刷（昭和57年）
- ・盛岡高等農林学校と鈴木梅太郎・宮澤賢治：岩手大学農学部農芸化学科内記念碑を建てる会、杜陵印刷（昭和59年）
- ・宮沢賢治の五十二箇月：佐藤 成編著、川嶋印刷（昭和61年）
- ・新校本宮澤賢治全集 第15巻：筑摩書房（平成7年）
- ・新校本宮澤賢治全集 第16巻（下）：筑摩書房（平成13年）